

〔叢桂偶記〕「吮癰

史記吳起傳曰、卒有病疽者、起爲吮之、卒母聞而哭之、人曰、子卒也、而將軍自吮其疽、何哭爲、母曰、非然。往年吳公吮其父、其父戰不旋踵遂死於敵、吳公今又吮其子、妾不知其死所矣、是以哭之。○中水戸城略

熱瘡

〔醫心方〕十七治熱瘡方第五

病源論云、諸陽氣在表、陽氣盛、則表熱、因運動勞役、湊理則虛而開、爲風邪所客、風熱相搏、留於皮膚、則生創、初作癰漿、黃汁出、風多則瘡、熱多則痛、血氣乘之、則多膿血、故名熱創之。

〔醍醐寺雜事記〕承平六年三月十三日、使典藥允淡海常邦將人夫三百餘人、曳醍醐寺塔心柱。○中余略

因患熱瘡、稱障不能會耳、

〔小右記〕萬壽二年八月廿八日丁丑、左兵衛督公信肱有熱瘡、法住寺僧都尋光皆有瘡物、忠明云、共可洽就中尋光僧都頗重者、大納言云、病人二人病極無事也者、

氣腫

〔書言字考節用集〕五肢體氣腫

〔病名彙解〕六氣腫 痘源ニ云、氣腫ハ其狀癰ノ如ク、頭ナフシテ虛腫シ、色變ゼズシテ皮上急痛シ、手纏ニ著ハ即痛ム、風邪氣搏テ生ズル所ナリ、

〔常山紀談〕二鎌信は長さのみ高からず、左の脚に氣腫、有て、あゆむ時足をひく如く見得しとなり、
〔筆のすさび〕四一人面瘡の話、仙臺の人怪病の圖、并に記事左に載す、本文漢語を以てすといへ
んために和解せよ、覽王父月池先生川桂嘗て余に語りて曰く、祖考華君の曰く、城東材木町に一商
あり、年二十五六、膝下に一瘡を生ず、逐漸にして大に、瘡口泛く開き、膿口三兩處、其の位置略人面

人面瘡